

里山に囲まれて建つ長さ約100mの木造平屋建ての園舎

東京ゆりかご幼稚園

設計 渡辺治建築都市設計事務所

施工 砂川・ロード建設共同企業体

所在地 東京都八王子市

TOKYO YURIKAGO KINDERGARTEN

architects:OSAMU WATANABE ARCHITECTS

ホールより園庭を介して保育棟を見る。東京都八王子市にある東京ゆりかご幼稚園の移転に際して建てられた新園舎。周辺の住宅街より15m上がった高台の山の麓に建つ。保育棟と遊戯棟からなる木造平屋建て。桁行き方向の柱スパンは5.4m。



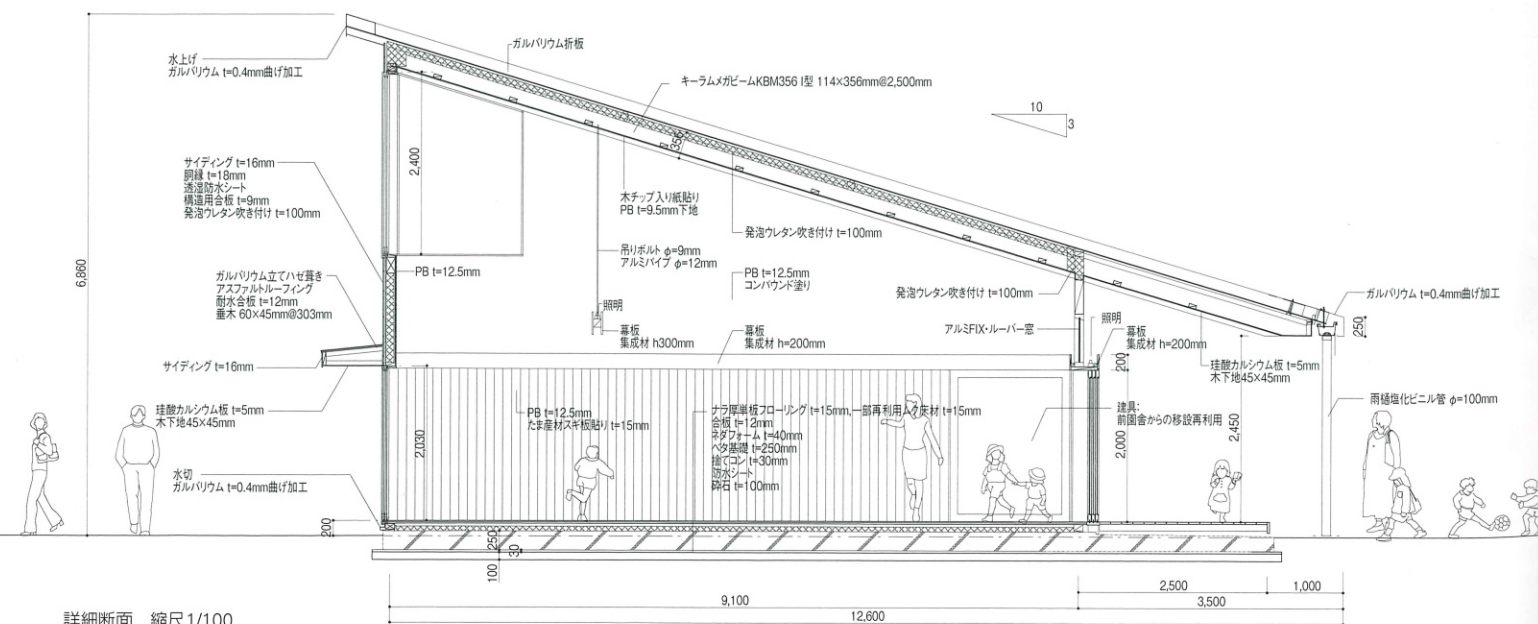
側外観。保育棟は長さ約100mの平屋建て、
側には住宅街、南側には里山が広がる。

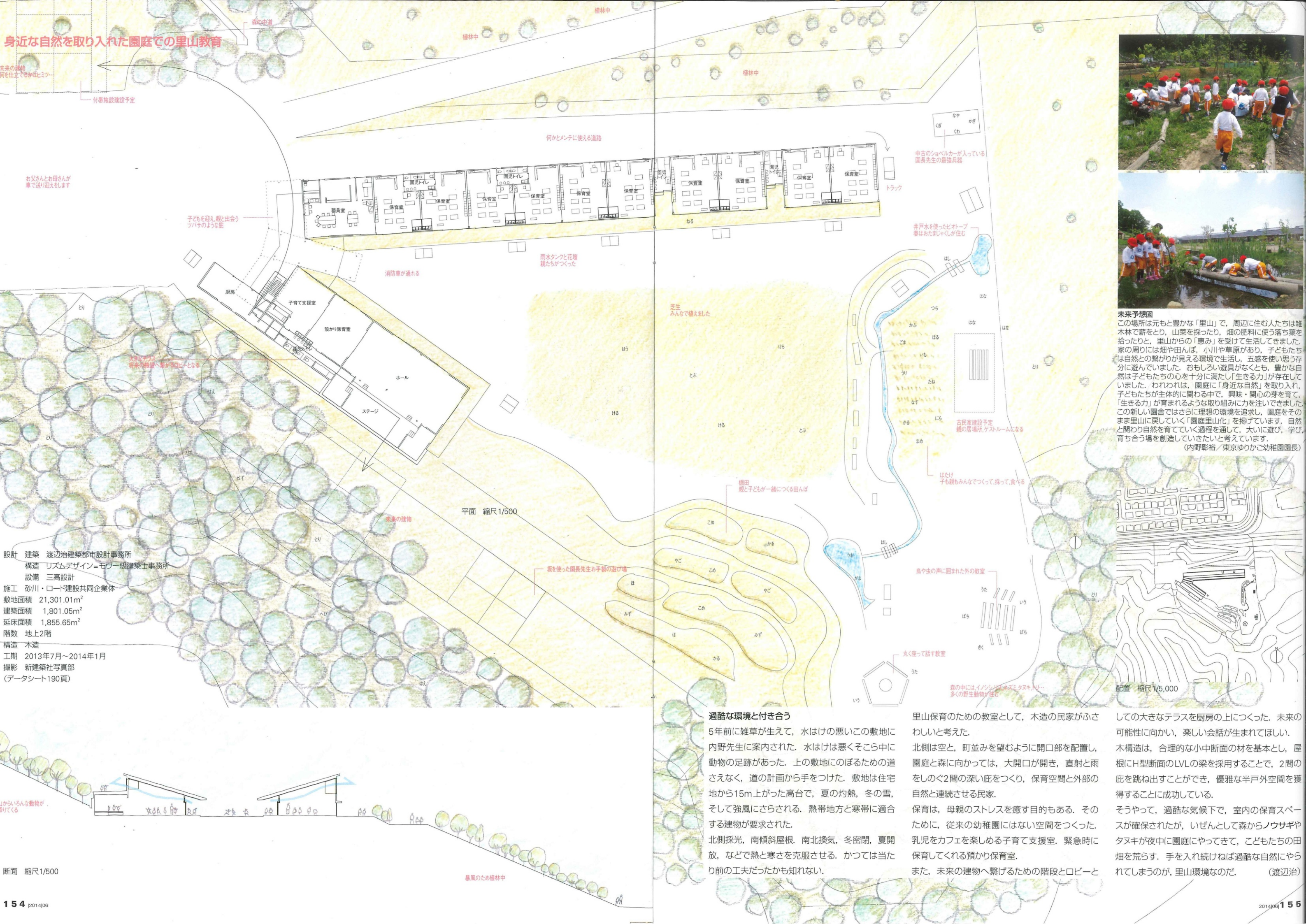


側エントランス。それぞれ北側の住宅街、
側の里山から園庭へと傾斜する屋根を持つ。



上：子育て支援室よりホールを見る。遊戯棟は扉を開けることで連続した大きな空間として使用可能。左下：保育室。保育棟は北側採光を得るため傾斜した屋根を持ち、天井高は約6m。
右下：ホール。屋根にはスパン長13.5mのキーラムメガビームを使用している。





身近な自然を取り入れた園庭での里山教育

未来の建物
何を仕立てるか悩む

付帯施設建設予定

お父さんとお母さんが
車で送り迎えをします

子どもを迎え親と出会う
ツバサのような庭

大きなテラス
将来の施設へ繋がるとなる

設計 建築 渡辺治建築都市設計事務所
構造 リズムデザイン=モウー級建築士事務所
設備 三高設計
施工 砂川・ロード建設共同企業体
敷地面積 21,301.01m²
建築面積 1,801.05m²
延床面積 1,855.65m²
階数 地上2階
構造 木造
工期 2013年7月~2014年1月
撮影 新建築社写真部
(データシート190頁)

断面 縮尺 1/500

未来予想図
この場所は元も豊かな「里山」で、周辺に住む人たちは雑木林で薪をとり、山菜を採ったり、畑の肥料に使う落ち葉を拾ったりと、里山からの「恵み」を受けて生活してきました。家の周りには畑や田んぼ、小川や草原があり、子どもたちは自然との繋がりが見える環境で生活し、五感を使い思う存分に遊んでいました。おもしろい遊具がなくとも、豊かな自然は子どもたちの心を十分に満たし「生きる力」が存在していました。われわれは、園庭に「身近な自然」を取り入れ、子どもたちが主体的に関わる中で、興味・関心の芽を育て、「生きる力」が育まれるような取り組みに力を注いできました。この新しい園舎ではさらに理想の環境を追求し、園庭をそのまま里山に戻していく「園庭里山化」を掲げています。自然と関わり自然を育てていく過程を通して、大いに遊び、学び、育ち合う場を創造していきたいと考えています。
(内野彰裕/東京ゆりかご幼稚園園長)

配置 縮尺 1/5,000

過酷な環境と付き合う

5年前に雑草が生えて、水はけの悪いこの敷地に内野先生に案内された。水はけは悪くそこら中に動物の足跡があった。上の敷地にのぼるための道さえなく、道の計画から手をつけた。敷地は住宅地から15m上がった高台で、夏の灼熱、冬の雪、そして強風にさらされる。熱帯地方と寒帯に適合する建物が要求された。北側採光、南傾斜屋根。南北換気、冬密閉、夏開放、などで熱と寒さを克服させる。かつては当たり前前の工夫だったかも知れない。

里山保育のための教室として、木造の民家がふさわしいと考えた。北側は空と、町並みを望むように開口部を配置し、園庭と森に向かっては、大開口が開き、直射と雨をしのぐ2間の深い庇をつくり、保育空間と外部の自然と連続させる民家。保育は、母親のストレスを癒す目的もある。そのために、従来の幼稚園にはない空間をつくった。乳児をカフェを楽しめる子育て支援室。緊急時に保育してくれる預かり保育室。また、未来の建物へ繋げるための階段とロビーと

しての大きなテラスを厨房の上につくった。未来の可能性に向かい、楽しい会話が生まれてほしい。木構造は、合理的な小中断面の材を基本とし、屋根にH型断面のLVLの梁を採用することで、2間の庇を跳ね出すことができ、優雅な半戶外空間を獲得することに成功している。そうやって、過酷な気候下で、室内の保育スペースが確保されたが、いざんとして森からノウサギやタヌキが夜中に園庭にやってきて、こどもたちの田畑を荒らす。手を入れ続けねば過酷な自然にやられてしまうのが、里山環境なのだ。(渡辺治)